

クリスマス、何がめでたい？

横山 順一

奨励者紹介〔よこやま・じゅんいち〕

日本キリスト教団東神戸教会牧師

その地方で羊飼いたちが野宿をしながら、夜通し羊の群れの番をしていた。すると、主の天使が近づき、主の栄光が周りを照らしたので、彼らは非常に恐れた。天使は言った。「恐れるな。わたしは、民全体に与えられる大きな喜びを告げる。今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになった。この方こそ主メシアである。あなたがたは、布にくるまって飼葉桶の中に寝ている乳飲み子を見つけるであろう。これがあなたがたへのしるしである。」すると、突然、この天使に天の大軍が加わり、神を賛美して言った。

「いと高きところには栄光、神にあれ、
地には平和、御心に適う人にあれ。」

天使たちが離れて天に去ったとき、羊飼いたちは、「さあ、ベツレヘムへ行こう。主が知らせてくださったその出来事を見ようではないか」と話し合った。そして急いで行って、マリアとヨセフ、また飼葉桶に寝かせてある乳飲み子を探し当てた。その光景を見て、羊飼いたちは、この幼子について天使が話してくれたことを人々に知らせた。聞いた者は皆、羊飼いたちの話をも不思議に思った。

(ルカによる福音書 2章8—18節)

意外な訪問客からの問いかけ

今から30年ほど前の昔話です。その頃私は牧師になったばかり、岐阜県の教会に初めての主任牧師として赴任し、張り切っていました。その最初のクリスマスを迎えるアドヴェントの、とある夜のことでした。一人の男性が教会を訪ねて来たのです。立派なスーツにコートが羽織っていました。一体何事かなと思ったら、スーツの襟の組バッジを見せつつ開ロー番、「クリスマスの何がめでたいんだ？」と言うのでした。

実はその方、いわゆる暴力団の方、ヤクザでした。「町はどこもかしこもクリスマスムード一色になっている」「一体いつから日本はキリスト教の国になってしまったのか」「お前は牧師だから分かっているだろう、何がめでたいんか教えてくれ」、そのように矢継ぎ早に言いました。

何しろ相手はヤクザですし、ちょっと酔っばらってもいましたし、正直言って怖かったです。恐る恐る返事をしようとした途端、「お前は上から目線でおるんかい！」と怒鳴られ、震え上がりました。当時いた教会の礼拝堂は上履きの教会で、私は彼より一段上に立っていたのです。

慌てて上り口に降り、上から目線をお詫びした上で、「私にもちょっと分かりません。教会は当然クリスマスをお祝いしますが、どうして世間がそうってしまったのか、私のほうが教えてもらいたいです」そう答えました。と言うか、それがもう精一杯の返答でした。

まあ、その時はそれでなんとかお帰りいただいたのです。「分かったら教えてくれ」とのことでした。こうし

て私は牧師になった年から、クリスマスを迎えるたびに、またいつあのお方が訪ねて来るか恐れつつ、「クリスマスって何でめでたいのだろう」と考えながら、今に至ることになったのです。

このシーズン、日本人はバカ騒ぎをしながら、やんわりと西洋の宗教行事を拒否しているのではないか、という分析をしている人もいるようですが、どうもそうは思えません。なんと、仏具店でもクリスマスセールをしているそうです。もはや国民行事なのではないかと思ったりします。

もちろん私は牧師ですから、自分の信じる宗教として教会でクリスマスをお祝いします。でも確かにUSJのほうがはるかにきらびやかなクリスマスを毎年演出しています。あるいは、クリスマスにとりたてて意味を求めなくても、みんなが楽しくて平和であれば、それだけでよいのかもしれません。実際、「みんなが楽しく平和」なひとときに、皆が気持ちを合わせているのでしょ。

ただ、それならあえてクリスマスでなくてもよいわけで、何か別の名前をつけたパーティーでも十分なはず。何の意味もなく、分からないままめでたいのでは、それはむしろ「おめでたい」というほかありません。キリスト教は言葉の宗教ですから、やっぱり意味を知らないともったいない。

けれども、肝心の聖書に、クリスマス、つまりイエスの誕生にまつわる記述があまりないのです。四つの福音書のうち、マルコやヨハネは全く何も記していません。わずかにマタイとルカ、二つだけが幾つかの出来事を書き残しているだけです。

その一つが先ほど読んでいただいたルカによる福音書の羊飼いに与えられた出来事でした。幼稚園の降誕劇で羊になった人もいることでしょう。ともかく、聖書では、イエスが生まれた知らせを、天使のお告げをとおして羊飼いが一番最初に与えられたことが書かれているのです。

友だちのいなかった羊飼いが

30年経つうちに段々教えられてきました。天使のお告げどおり、救い主であるイエスを見に行つたあとのことが17節に、こう書かれています。「その光景を見て、羊飼いたちは、この幼子について天使が話してくれたことを人々に知らせた」。これが今日のテキストのキーワードです。

短いですが、これは実に驚くべき記述だと知らされました。と言うのは、当時、羊飼いに知り合いはまずいなかったからです。私たちにとって羊飼いいえ、多くの人が、たとえばアルプスの高原とか、ニュージーランドの広大な草原で穏やかに羊の世話をしている牧歌的な光景を想像することでしょう。でも当時のイスラエルの羊飼いいえ、お金持ちから羊を預かって、定住する家もなく、一年中を羊とともに点々と移動する、町中に住む人にとっては忘れられ、時にはさげすまされた、差別を受けていた人々だったのです。

つまり自分たちの仲間以外に、友だちなどそうそういなかった。その羊飼いたちが、イエスを見に行つたあと、天使のお告げについて人々に、他者に知らせたというのです。羊飼いたちがありえない行動を取つたことが証言されているのです。よほど嬉しかったのでしょ。

救い主は赤ん坊(命)だった

さあ、その羊飼いたちが見た「救い主」ですが、皆さんは救い主について、どういうイメージをもちますか。救い主では難しいかもしれません。大統領ならどうでしょう。トランプさんは大統領に相応しいでしょうか。

たとえばどんな人だったら大統領として納得がいきますか。やっぱり見た目は大事かもしれませんが。頭も良いほうが当然いいでしょう。貧しいよりお金持ちのほうが、これもよいかもしれません。私たちがリーダーに求めるものの多くは、この世的な価値基準によることでしょう。一言で言うなら「力強い」人と言えるかもしれません。

実は聖書の時代、「救い主」とは、王様のことを指していました。だから多くの人たちは王様にさまざまな力を求めたのです。ただし、都会に住むお金持ちたちとは違って、相当数の人は、実際には王様を見たことはありませんでした。写真さえない、紙すらない時代です。王様と言っても、姿・形が何も想像もできない人物だったのです。ましてや都会から離れて放浪の旅を一年中続ける生活だった羊飼いたちにとっては。

ところが、その羊飼いたちが行ってそこに見たのは、名もない一人の幼子、生まれたばかりの赤ちゃんだったわけです。力があるどころか、誰かに世話をしてもらわなければ何一つできない、生きることもできない赤ちゃんでした。それを天使は「民全体に与えられる大きな喜び」と告げました。「今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになった。この方こそ主メシアである」と。

普段羊飼いたちは忘れ去られ、差別を受けていた人たちでした。誰が自分たちを覚えてくれ、人間扱いしてくれるだろう。どんな王様がやって来て、そうしてくれるだろう。そしてそれはいつになったら実現するだろう。粗末に扱われる中、誰よりも救いについて飢えていた羊飼いたちだったでしょう。もしかしたらそんなささやかな願いさえ諦めて、たんたんと不遇の日々を送っていたのかもしれない。

そんな彼らが見た救い主は、この世の価値基準には何も当てはまらない存在、あえて一言で言うなら小さな「命」でした。彼らはその赤ちゃんの命の中に、確かに天使のお告げを見て受け取りました。救いとは「命が大切にされること」、それが救い主の意味だったのです。目が覚めるような驚きであると同時に経験したことのない喜びを感じたのです。その時寂しかった彼らの命も一緒に回復しました。初めて、諦めていた希望が与えられたのです。だからこそ、それまでは関係が断ち切られていた他の人々のところへ出かけて行き、知らない人たちに衝撃と喜びの体験を聞かせて回ったのでした。これがクリスマスの奇跡なのかもしれません。

天国の体験

私は大阪の釜ヶ崎で日雇労働の人たちの人権を守る運動をしています。あまりにも不当なことが多いので、時々裁判に訴えます。結果はほとんど負けです。でも、1度だけ勝ったことがあります。大阪市の不適切な対応で、選挙で投票することができなかった男性が大阪市を訴えたのです。判決は損害賠償として市に3000円を払え、というものでした。投票できなかった人権侵害、苦痛、裁判に投じた労力を考えれば、小さな小さな勝利にすぎません。でも判決後、法廷から下るエレベーターに乗った時、支援者の一人が「勝ったね!良かったね!」と言って涙したのです。その瞬間、そこにいたみんなが肩を組んで泣きました。お互いに支援者でしたが、ほとんど名前も知らない仲間たちでした。そのみんなが狭いエレベーターの中で、抱き合っ泣いたのです。その時、私は天国がここにある、と信じました。小さな命が大切にされるところ、そこは天国です。そしてそれを告げ知らせる時、それがクリスマスだと思いました。

やっぱりめでたい

しかし今もお金や学歴や地位など、この世的な価値基準が世界に満ちあふれています。相変わらず力あるリーダーが求められ、力による政治が行われています。命が粗末に扱われたままになっています。

私は今なら、もし彼が生きていて、またやって来たなら、あのヤクザの方に答えることができます。「命が大切にされることが救いの意味。クリスマスの意味ですよ」。命が覚えられ、大事にされ、愛される。それがクリスマスであるなら、特別豪華なお祝いをしなくても、やっぱりめでたい、本当にめでたい、心からめでたいのだと。こんな喜びの出来事はないでしょう。ですから1人ではなく、羊飼いたちが他者に知らせたように、みんなでお祝いしたい、皆に伝えたい、届けたい。そう答えたいと思っています。

2018年12月19日 今出川水曜チャペル・アワー「アドベント礼拝奨励」記録